

2013. 4/21 記念

評・開沼 博 (社会学者  
福島大特任研究員)

## 戦後社会の変動と記憶

荻野昌弘編

深く爪痕を残しているのだ。

また、法制度的に日本にも

米国にも包摂されない立場に

私たちのもつ「戦争の表象」の多くがマスメディアや研究者によつて集められた「当事者による戦争体験の回顧」によつて作られるのだとすれば、本書の独自性はそのような「記憶する個人」ではなく「戦争が生み出した社会」を議論の中心に据えた点にある。

敗戦によつて生じた大量の引き揚げ者は地域別の人口構

成に大きな変化を引き起こし、戦後社会の行方に強い影響を与えた。同様に、無用となつた広大な軍用地には、戦後「平和産業都市」に転用された例などあるが、その基本的な構造、水道や病院、道路網など軍のために作られた施設が現在に至るまで街の姿を規定する例もある。戦争が作った空間のあり方が現代にも

ある在米被爆者や、同様に、日本にも自國にも包摂されない集団虐殺・レイプ被害にあつたフィリピンの村人たちの事例は戦争を「移動」や「境界」という観点から捉え直す。

戦争体験者が減る中、私たちはいかに戦争を考え続けられるのか。その手がかりがここにあるのかもしれない。(新

曜社、3600円)